

算命学中庸

【初年】 38回目

38回目の授業はこのページからです。

授業科目 【陰占宿命】

【初年】 38回目 【陰占宿命】 01

□ 陰占宿命 (いんせんしゆくめい)

38回目の授業は、少し「陰占」についての学びです。

「陽占」つまり人体図には〔主星〕〔第一命星〕〔第二命星〕
〔第三命星〕〔第四命星〕という五つの場所があります。

人体図の〔主星〕は自分の場所、〔第一命星〕は配偶者の場所、
〔第二命星〕は目下・子供の場所、〔第三命星〕は友人・兄弟の
場所、〔第四命星〕は親・目上の場所と決まっています。

「陽占」つまり人体図の観方をやりましたときに……、真ん中は〔主星〕で自分の場所、〔第一命星〕は配偶者の場所、このように人体図も人物の場所は決まっています。という話を少し致しました。

⇒「陰占」の宿命は、人物の場所が決まっています。

〔たとえば〕下記のような宿命があるとします。

宿命（1）

日	月	年	
干	干	干	
支	支	支	
乙	癸	甲	
未	酉	申	

甲申は年干支

癸酉は月干支

乙未は日干支

}

です

陰占宿命は、人物の場所が決まっている

年・月・日の干支で「宿命」をあらわします。

年月日の3つの時間のなかでは、年が一番長いです。

年月日のなかで、年が一番長いということで、年干支のことを『最大時空間』といいます。

「甲申」年干支 — 最大時空間 (さいだいじくうかん)

「癸酉」月干支 — 中時空間 (ちゅうじくうかん)

「乙未」日干支 — 最小時空間 (さいしょうじくうかん)

自然界のなかにおける **年・月・日** という時間の単位は、**年** が一番長い時間の単位になりますので、「年干支」は『最大時空間』に位置します。

月 は、中間の長さですから『中時空間』という名称が付いています。

「月干支」は『中時空間』に位置します。

1日 という時間単位は、1番短い時間の単位なので『最小時空間』といいます。

「日干支」は『最小時空間』に位置します。

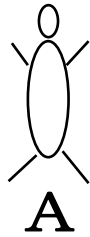
実は——この考え方を基にして、宿命の人物の場所が決まっているのです。

ご一緒に考えて頂きながら……説明していきます。

ねんかんし さいだいじくうかん
☞ 年干支 — 最大時空間はつぎのように考えます。

「年干支」

ここで示す宿命の人物を、仮にAさんとしします。

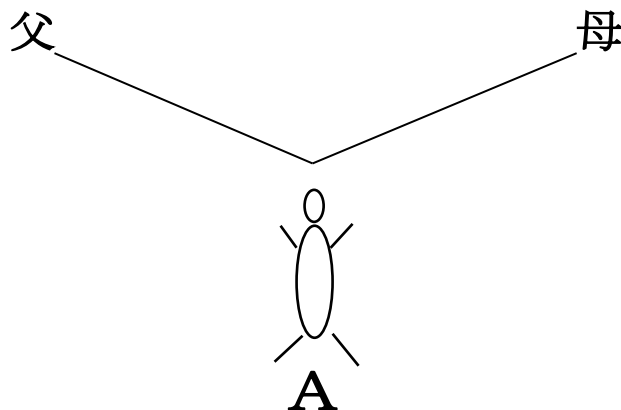


先祖 (1)

このAさんが、この世に生まれてきたという事実がある
とすれば、このAさんには両親がいるはずです。

両親がいなければ、この世に生れていません。

Aさんがこの世に生れてきたという事実からしまして、
Aさんの父と母に当たる人物も、この世に存在していた
という証拠であるはずです。



先祖 (2)

このことは、どなたにもおなじことがいえるはずです。
Aさんという人間が、この世に生まれてきました——。
という事実からして、このAさんの、父にあたる人と、
母にあたる人が、1人ずつこの世に存在していたという
証拠になるはずです。

多くの人達のなかには「私の父は誰なのかわからない」
という人も、世の中にはおられるでしょう。
あるいは「お母さんと生き別れで、母と会ったこともあ
りません」そういう人もおられるでしょう。

かり
仮に、父親がどこの誰だかわからない……という場合で
あっても、本人の父親は、必ず、この世に1人だけ存在
しているはずです。

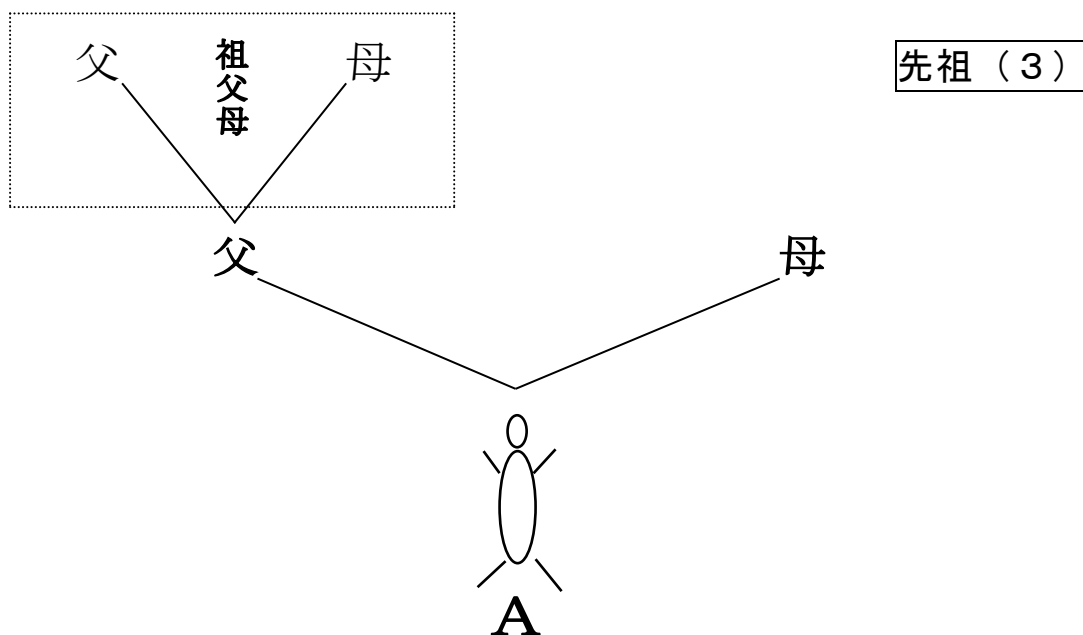
「その父親が^{いま}現在、生きているのかどうか、それはわか
りません」と、〇〇さんがいっても、〇〇さんの父親の
存在がなければ、〇〇さんは生れていません。

〇〇さんが、^{いま}現在生きているという事実からして、父親
も、母親も存在していた。ということはいえるはずです。

Aさんの話へもどします ➡

そうしますと、**A**さんの父にあたる人物がこの世に存在していたということは、そのまた、父と母にあたる人物も、この世に存在していたはずです。

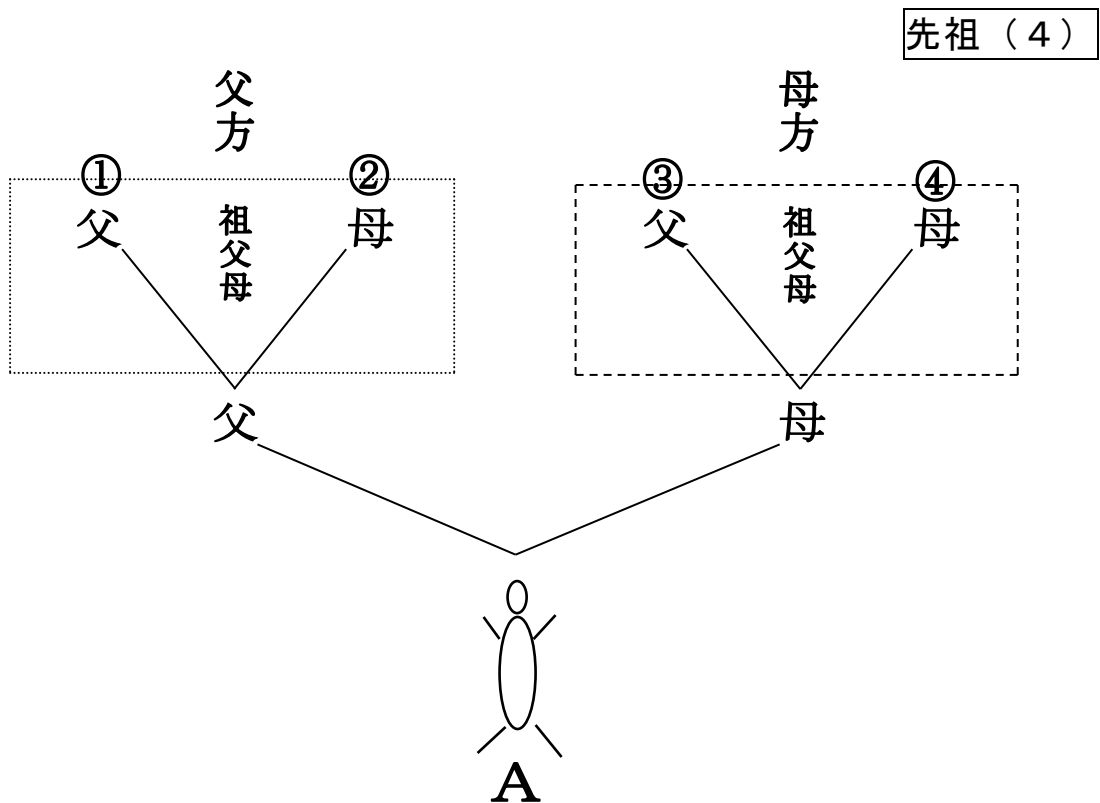
つまり、**A**さんの祖父母です。



Aさんのおじいさん・おばあさんに当たる人物が、生存しているのか、過去の人になったのかわかりませんが、確かに存在していました。それゆえに**A**さんは生まれてきたわけです。

そうしますと、**A**さんの母親に当たる人も、自分だけのチカラで、この世に生れてくることは不可能ですから、

Aさんの母親にも、母が存在したことになりますから、母親にも、両親に当たる人物がこの世に存在していたという事実につながっていくはずです。

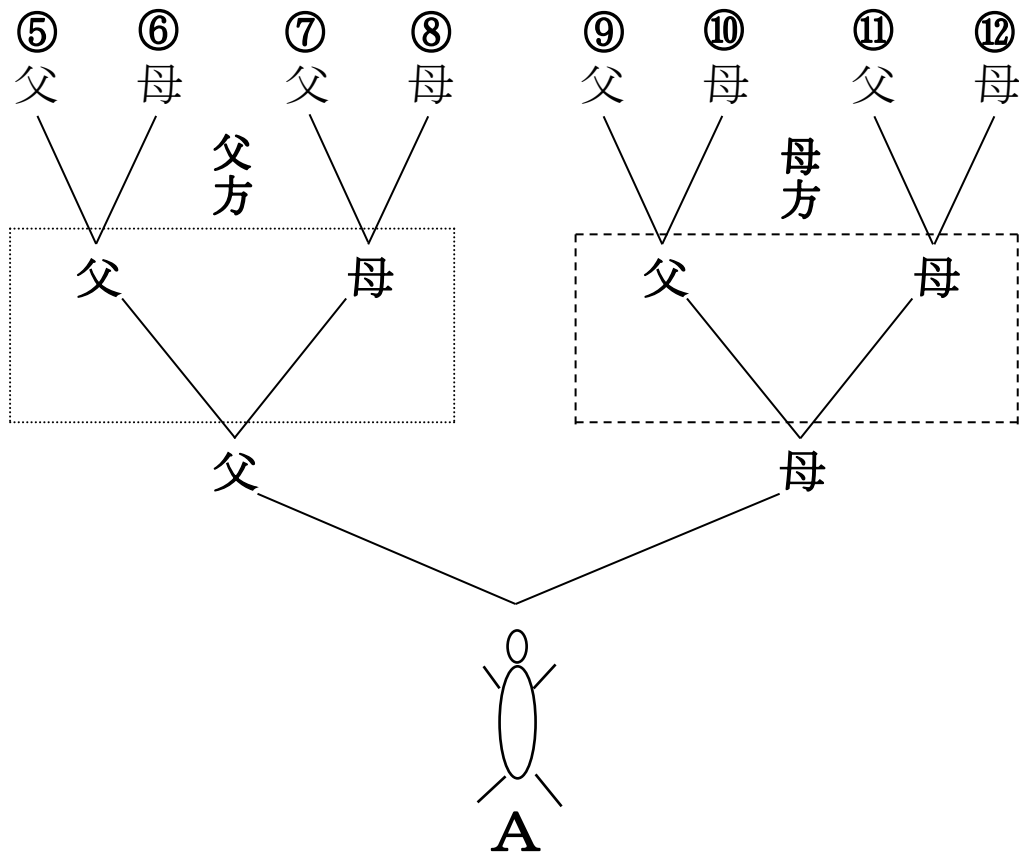


本人のAさんからみて、おじいさん・おばあさんに当たる人物は、4人いるわけです。

このことはAさんに限らず、どの人にでもいえます。

父方のおじいさんが、この世に存在していましたという事実からして、そのおじいさんの父⑤と母⑥に当たる人物も、この世に存在していたはずです。 ➡

先祖（5）



当然、父方のおばあさんの両親に当たる⑤と⑥がいたわけです。Aさんがこの世に存在している。あるいは生まれて来たという事実からして、このようにいえるはずです。Aさんからみれば、父方の⑤⑥⑦⑧は曾祖父母の代に当たります。母方の⑨⑩⑪⑫も4人も、曾おじいさんと曾おばあさんです。

この祖先にあたる人達がどのような人物であっても……

⑤⑥⑦⑧ ⑨⑩⑪⑫ というように合計8人いるわけです。

祖先がこの^{あた}辺りまで来ると、8人が、どこの誰なのか、よくわからないという人が、多くなってくるかも知れませんが、

名前がわからなくても、曾おじいさん・曾おばあさんがいなければ、この世にAさんは生れて来ていませんから、必ず、この人達は存在していたはずですよ。

そして、曾おじいさんが、この世にいたということは、曾おじいさんの両親に当たる人もこの世にいないとすれば、曾おじいさんは生れて来れないわけですから、その両親もいたはずだということになります。

この曾おばあさんの両親も、この世にいないとすればならないですよ。

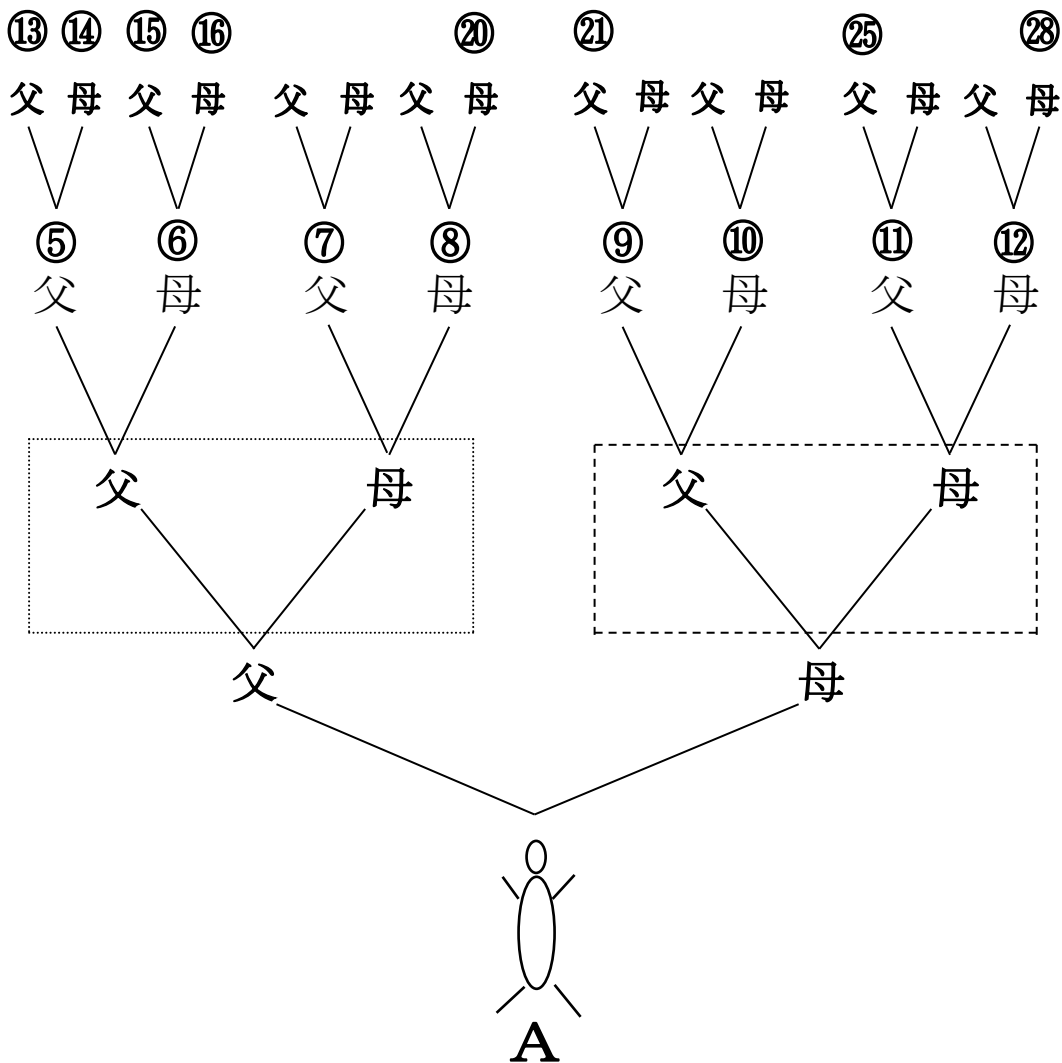
それぞれ、必ず、両親が存在してなければ、この世には生れていないですよ。

ここまで来ると、Aさんの曾曾おじいさん・曾曾おばあさんに当たる代は、全部で16人いることになります。

これはどこまでやっても切りはないのですが、➡

宿命(6)として、28人まで書きました。

先祖(6)



仮に、40代先祖をさかのぼっていきますと、先祖の数は、1兆人になります。

40代 ⇒ 1兆人

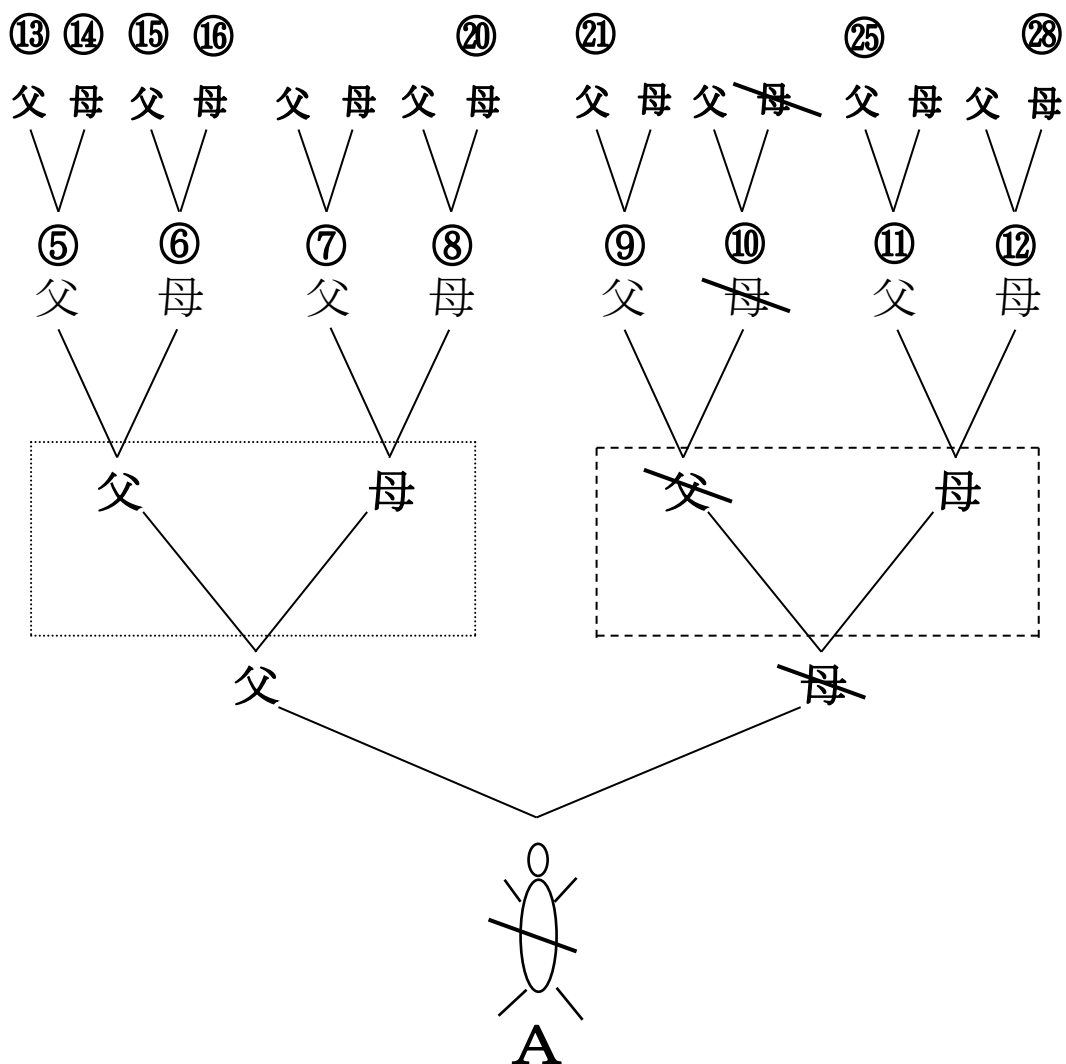
1兆人の自分の先祖の代が出てきてしまうわけです。

そんな昔に、地球上に1兆人の人口があったはずはないですし、あまりにも多すぎます。

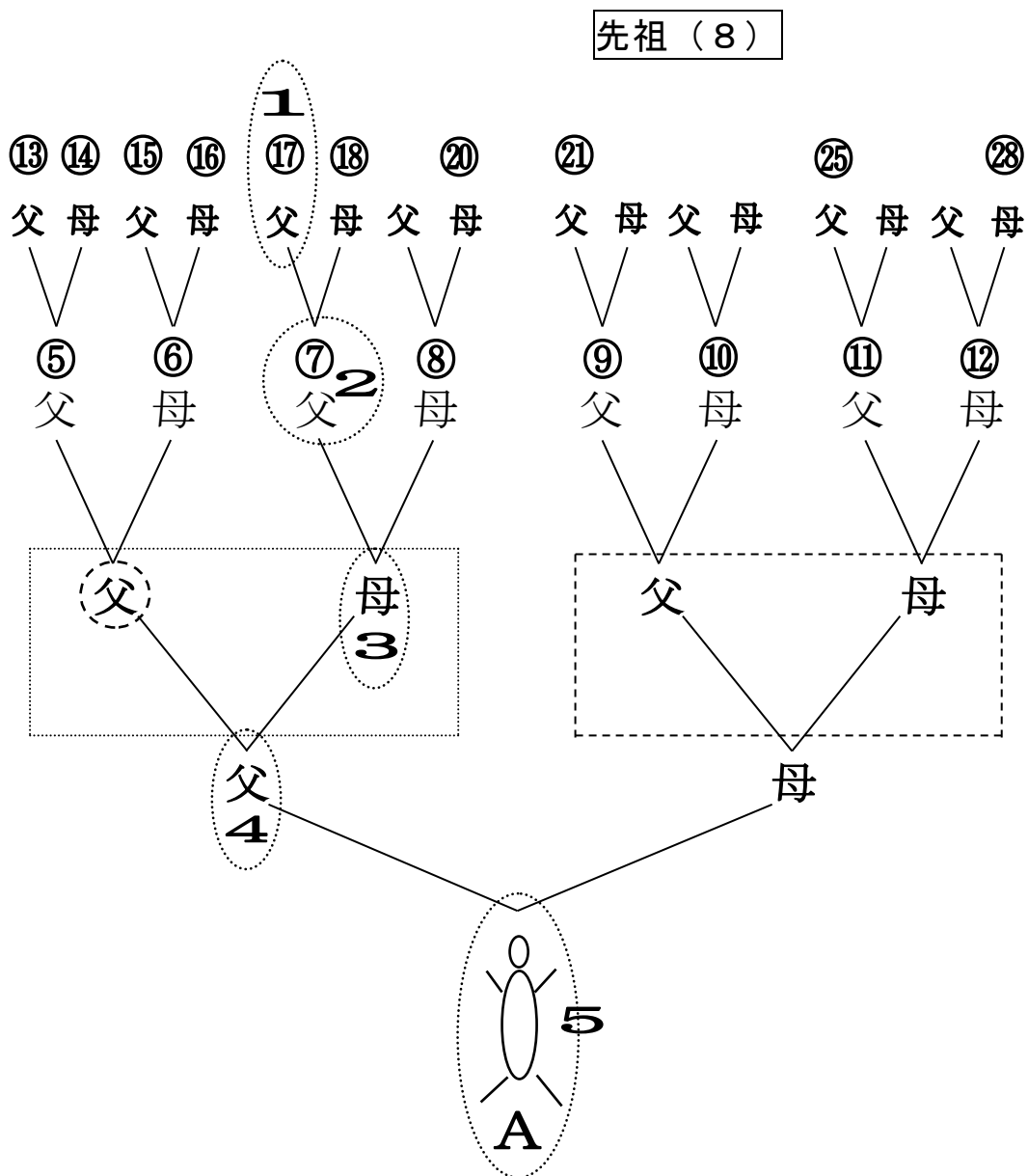
その理由は、後でチョット説明しますが、ここでいえることは、Aさんというたった1人の人間がこの世に生れてくるためには、これだけ膨大な数の先祖が必要だということです。

宿命(8) のなかの、どの人でもいいのですが、仮に、^{かり}曾曾おばあさんがこの世に生れて来なかったら、その人の子供であるこの人も、この世に生れて来れません。

先祖(7)



当然、どんなに膨大な数の先祖が、存在していたとしても、このなかの、たった1人でも欠けたら、Aさん生まれていないことになるわけです。



あるいは **1** ひいひいおじいさんが、となりのひいひいおばあさん ⑱ ではなくて、別な女性と結婚していたら、この夫婦の間に生まれてくる **⑦父2** は、まったく違う

人間として生まれてきたはずです。

⑦父**2**が、⑧の女性ではなくて、別の女性と結婚していたら、母**3**は生まれて来ないですよ。

母**3**の母親なり父親が違う人と結婚していたら、その子供、つまり母**3**は、まったく別の人間になって生まれていたはずですよ。

母**3**が別の人間になっていたら、この人の子供である父**4**は別な人間に生まれていたかも知れないわけですよ。

父**4**が違う人間だったら、Aさん**5**も、まったく別な人間として、この世に生まれて来たはずですよ。もしかすると、生まれて来なかったかも知れないですよ。

子供が「お母さん、なんでお父さんと結婚したの……」
といたりする話を聞きますけど、自分のお母さんが別の男の人と結婚していたら、自分（子供）は生まれていなかったですよ。

もし、子供の両親のどちらかが、別の人間であれば、たとえ生まれるにしても、性格も違えば、当然、宿命も違いますし、性別すら違っていたかも知れないわけです。

Aさんという人間が、この世に生まれて来たということは、この先祖の組み合わせであったから、Aさんという人間が生まれてきたのです。

この組み合わせのなかに、たった一人でも別な人間が混じっていたら——別な言い方をすれば、どこかの代で、別な人間に代わってしまっていたら、Aさんという人間は生まれていなかったはずですよ。

Aさんがこの世に生まれて来るためには、これだけ膨大な先祖が必要だったということです。

Aさんの背後には、膨大な先祖が存在していた、そういう意味になるわけです。

それで——再度——宿命を書きなおしました ➡ 宿命(2)

日 干 支	月 干 支	年 干 支
乙	癸	甲
未	酉	申
		↓
		先祖

2ページの 宿命(1) とおなじです宿命(2)

どなたでも、この世に生まれて来るためには、その背景に、先祖(8)のように、膨大な数の先祖が必要です。

そのなかの一人でも欠けたら、宿命(2)の人は、現世に生まれて来ていないわけですから、宿命には先祖が影響しているはずである。と考えたのです。

そうしますと、膨大な数の先祖を包括できる場所は……年干支の「最大時空間」であるといえるわけです。

このような理由で、「年干支」を先祖の場所と決めました。自分は先祖から、どういう運気の影響を受けているとか、あるいは、自分は先祖から、どのような因縁を受け継いでいるのか、もらっているのか、そういう姿を観る技法があります。その技法は「年干支」を先祖の場所として占いをしていくようになります。

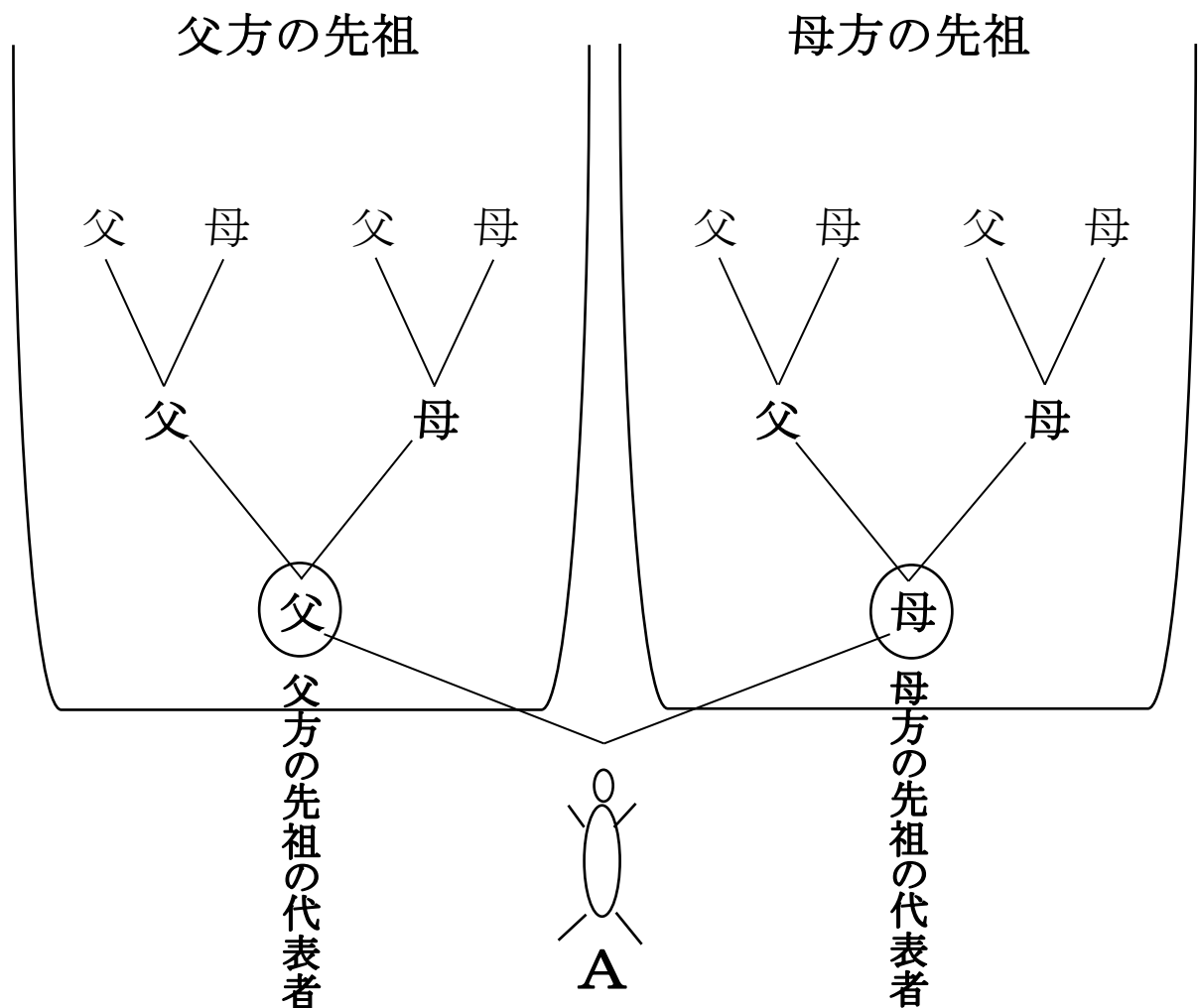
どんなに数が多くても **先祖(9)** の図式で、父方の先祖と、母方の先祖、そのどちらかに分けられるはずです。

このときに、自分にとって、直接つながりのある先祖は、このなかで、父 と 母 だと考えたわけです。

つまり、自分を直接生んでくれた、あるいは育ててくれた父親と母親が、自分にとっては、もっとも身近な先祖であるはずです。

自分から見れば、『父は父方の先祖の代表者』と考えることができるわけです。

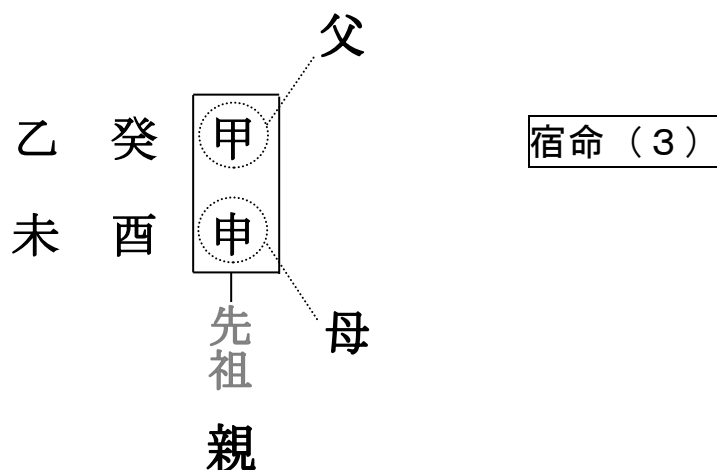
先祖(10)



父方の先祖だけでも、ものすごく膨大な数の先祖がいるでしょうけど、どんな膨大な数の先祖がいても、父方の先祖はすべて父親を通して、Aさんと同つながりをもっています。ゆえに、父方の先祖の代表が父親になります。

おなじく『母親は母方の先祖の代表者』だと考えます。そして、陰陽の法則で〔父は陽〕〔母は陰〕になります。〔男は陽〕〔女は陰〕といってもよいです。

父と母では、父が陽であり、陽のほうに主体性がある。上と下ということでは、陽が上に来るという考え方をしています。(水は上から下へと流れます)



「年干支」は、先祖の場所といいましたが、言葉^かを換えると、ここは親の場所でもあるのです。

宿命(3) の年干支は「甲申」という干支です。

天干の「甲木」と 地支の（申金）というふうにして……

「干」と（支）を分割して考えるときは、「年干」を父親、
（年支）を母親というように、「干」と（支）それぞれに
人物を当て嵌^はめて、観ていくようになります。

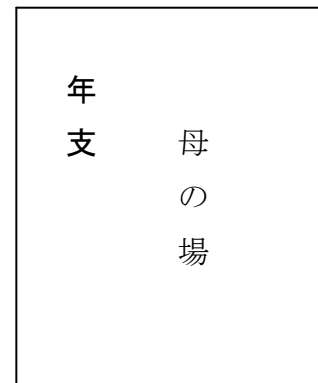
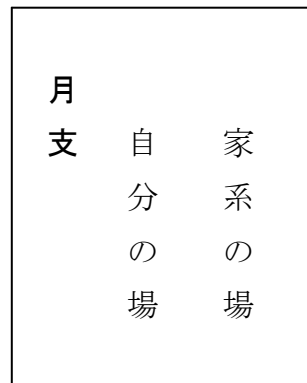
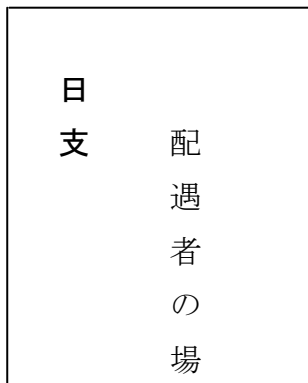
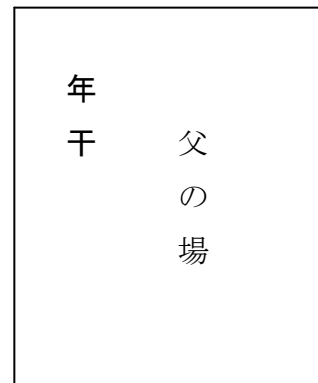
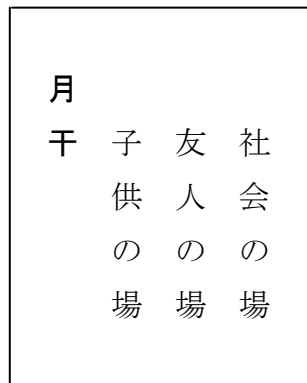
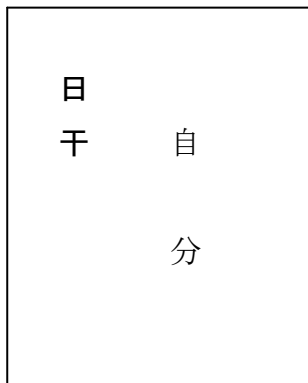
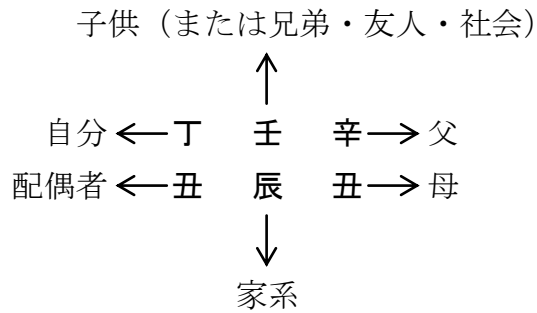
年干支は先祖の場所ですけど、ここは親の場所でもある
のです。

さらに独立して観る場合は、上の年干が父親、下の年支
を母親の場所として占いをします。

🔍 「年干支」「月干支」「日干支」に配置されている人物を表した図です。

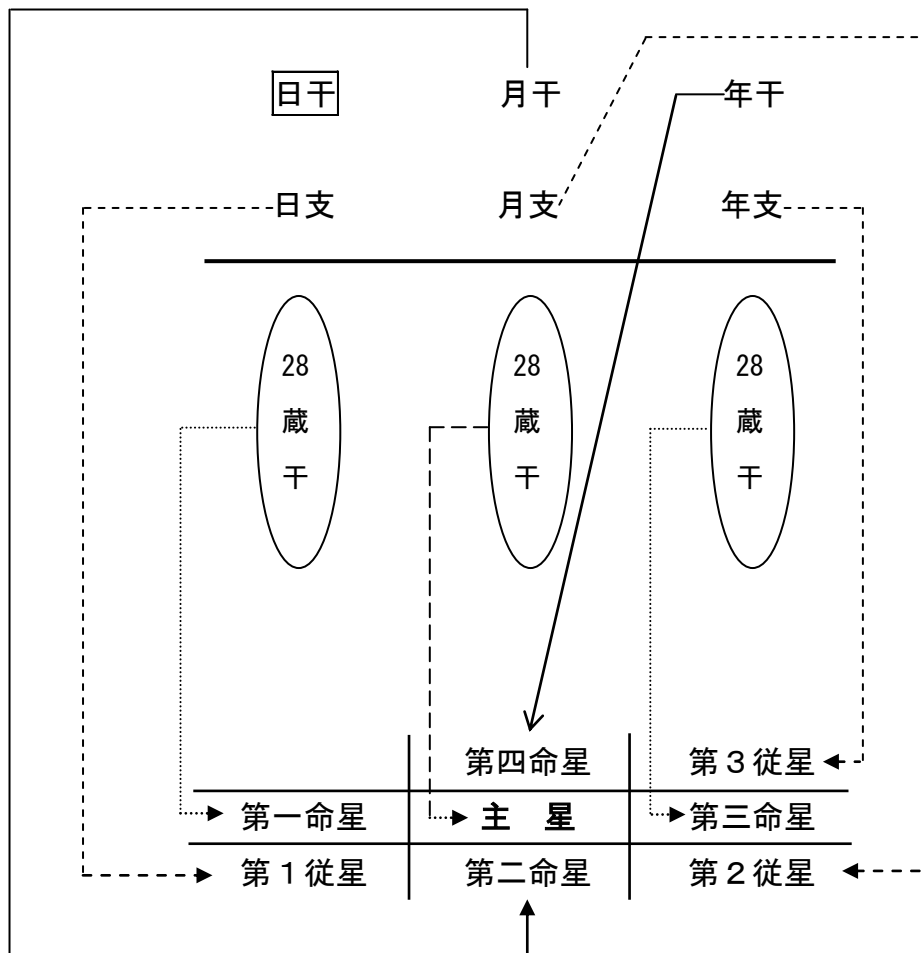
資料【陰占宿命】

本科1



🔍 陰占「年干支」「月干支」「日干支」から、〔十大主星〕の星に直したときに、人体図のどの場所に配置するのかを表した図です。

星の変換（陰占から陽占）



	年 干	年 支
日支の歳干	月支の歳干	年支の歳干
日 支	月 干	月 支

☞ 話をもどします。(19 頁の続きです)

実際に占いをするときには、「年干支」を『先祖の場所』と位置づけて観るよりも、20 ページの図に記載されているように、「年干支」を『親の場所』と位置づけて観るほうが多いです。

具体的には、年干は父親、年支は母親として観る場合のほうが多いです。☞ 20 頁の図を参照ください

☞ さて、先祖を40代遡ると先祖の数が一兆人になってしまいます。[その理由は後で説明しますと、11 ページに書きました] 数字の上では、そういう数になってしまうのですが、あまりにも多すぎます。

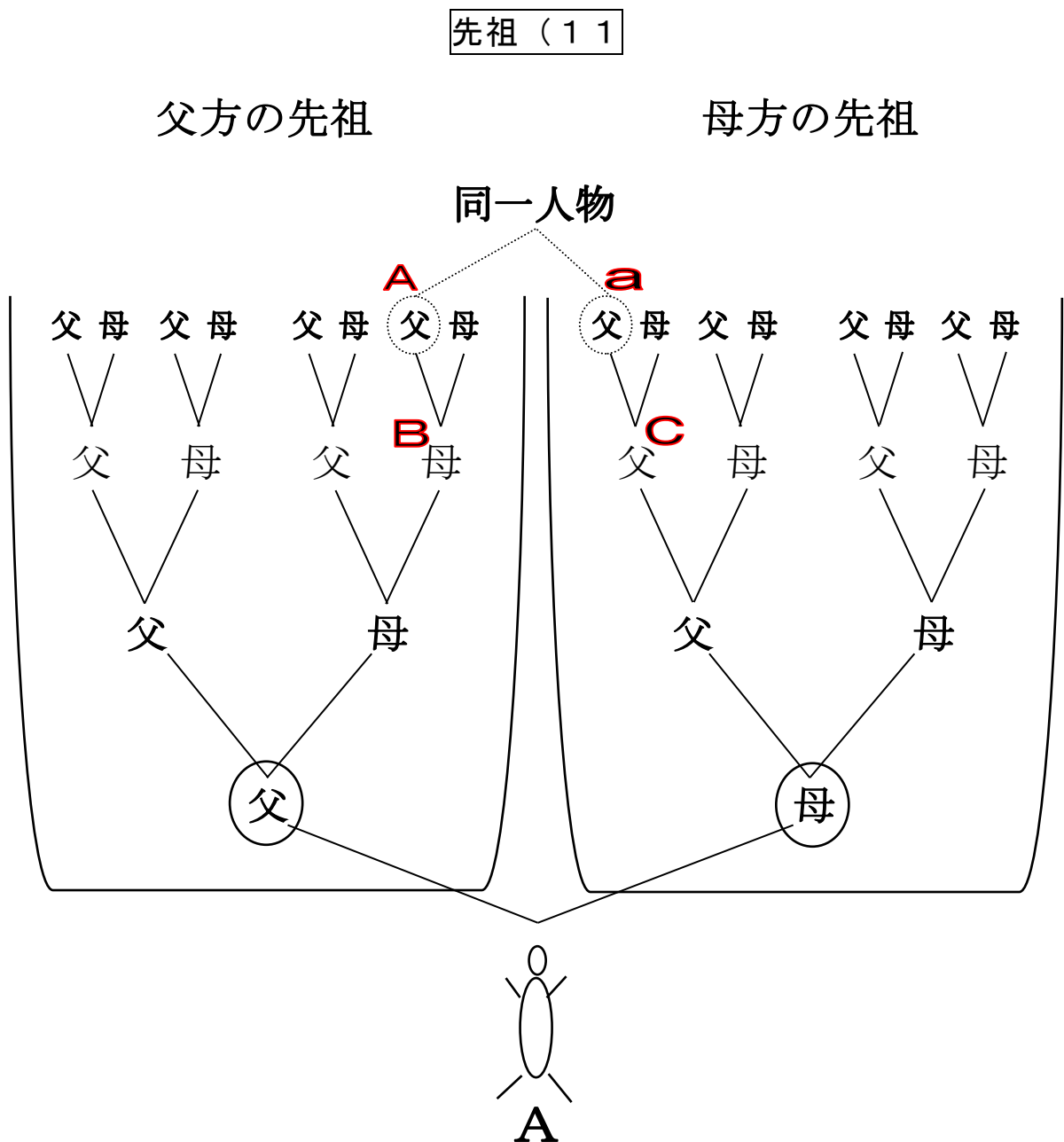
一兆人という数字は、地球上の人口をはるかに超えています。40代前の人口がこのような大きな数字ではないはずです。

何故、これほどに多くなり過ぎてしまうのか——ということになります。

そうしますと、現実的な数字にまで、減らすためには、どのような理由が挙げられるのかです。

一夫多妻もその一つと考えられます。

まず、わかりやすいのは〔たとえば〕ですが、このなかの、父方の曾曾おじいさん **A** と、母方の曾曾おじいさん **a** が、同一人物と考えることは可能です。



たとえばですが…… **A**おじいさんと、**a**おじいさんは、同一人物です。一夫多妻ということで考えると、**A** が

奥さんを二人もらったわけですね。

一方は正妻、一方はただの愛人、それでも構いません。

どのような理由であっても、**A** おじいさんと、**a** おじいさんは同一人物なわけです。

そうしますと、**A** と **a** が同一人物だとしたら、この人物の子供である **B** と **C** は異母兄弟ですね。

同一人物のお父さんから、生れた兄弟ですね。

B と **C** が兄弟だったら、この人の子供であるこの人と、この人の子供であるこの人は、この図式でいけば従兄弟です。

図に (**D E**) (**F G**) を書き加えてみてください。

ここがイトコだったら、この人の子供であるこの人と、この人の子供であるこの人は、ハトコ同士です。

このように続くはずです。

〔たとえば〕ですけど、話として……そのハトコですが、ハトコとは知らずに、知り合って結婚して、子供を生んでいるとすれば、ハトコ同士というのは一つの例でして、実際はもっと遠い親戚であったかも知れないのです。

ただ——少なくとも、この先祖たちのなかに、いま説明したような図式が、いかに多く含まれているのかということなのです。

それが、もう、あっちにも、こっちにもあるわけです。

あっちこっちにあって、絡み合^{から}ってしまっている……

そのように考えれば、実際には、1兆人もの先祖は必要ないわけです。

理論的には、1兆人の先祖は必要ですけど、同一人物があっちにも、こっちにもいるわけですから……。

ここで考えてみて頂きたいのですが、現^{いま}在、皆さんのなかで、ご結婚されている方は「自分とご主人とはハトコであるはずはない」そのように思っている方がほとんどだと想^{おも}うのです。

そうしますと、何を根拠^{こんきよ}にしてハトコというのか……、自分から見て、曾曾おじいさん、曾曾おばあさんの代、それらの代のなかで、先祖が1人でも共有していたら、ハトコになるわけです。

自分の曾曾おじいさんと、自分の妻の曾曾おばあさんが、

おなじ人物だとしたら、つまり、自分の先祖と妻の先祖のなかに同一人物がいるとすれば、それだけでハトコになります。

皆さんが、自分から見て〔自分の両親は、にハトコ同士ではないですよ。 他人同士で結婚しています〕 と思っている方がほとんどだと想いますが、必ずどの人にも、曾曾おじいさん・曾曾おばあさんは、16人います。

自分の曾曾おじいさん16人と、〔例えば〕 夫の曾曾おじいさん16人、もし全部わかったとしたら、もしかすると、そこに1人位は重なっているかも知れないのです。重なっていたら、もうハトコです。

その16人のなかの先祖が、たった1人でも重なっていたら、もうハトコです。

そこで重なっていないとしても、さらに一つ上の代にいけば、32人先祖が出ます。そうすると、そこでは1人位は重なっているかも知れません。その上は64人。

128…、256…、512…と、倍々に増えて行きますね。たどって行けば、いつか必ず重なります。

日本に1億2千万人以上の人口があり、その1人・1人に、これだけ膨大な数の先祖が、背景にいるとしたらどうでしょう……。

私の先祖も、こんなにたくさんいますし、皆さん1人・1人にも、こんなにたくさん先祖がいます。ということであれば、人口がいくらあったって足りないです。

ということは、いかに多くの人達が先祖を共有しているのかということです。

もう、日本人というだけで「私も皆さんも親戚ですよ」
そういっても過言ではないでしょう。

まったく先祖を共有していないという人は、1人もいないと言い切ってよいほどです。もし、共有していないという人物が、いたとすれば奇跡です。

先祖を何代かさかのぼれば、必ず、そこには共通の先祖が出てくるはずで

しかし——それは記録にも残っていませんし、どこの誰かも不明です。ゆえに、知らないで男女が巡り合って、結婚して、また子供をつくっているだけなのです。

「人類みな兄弟」という言葉は、キリストとか、孔子とか、

ぶっだ
仏陀とか、さまざまな説があるようですが、まんざら嘘
ではないのです、
兄弟とまでいかななくても、必ず、どこかで、つながって
いるはずです。

うちは古い家系で家系図が残っていて、私の先祖の実家
は源氏につながっているとか……私の先祖はもっとさか
のぼると皇族につながっているとか、だから私は天皇家
と親戚だとか、そうおっしゃる方もいるそうです。

これだけ膨大な数の先祖がいたら、このなかに1人位、
源氏が混ざっていて当たり前でしょうし、1人位、皇族
が入っていても当たり前です。

まったく入っていない人は、この日本で考えれば1人も
いないと言い切れるはずです。

もし、まったく純血だとすれば、これも奇跡です。

それゆえに、40代さかのぼると、1兆人ではなくて、
もっと現実的な数字にまで下がっていきます。

それにしても、膨大な数の先祖がいるという事実、それ
に変わりはないのです。

☞ つぎは、^{にっかんし}日干支 — ^{さいしょうじくうかん}最小時空間です。

「日干支」

さきほど——宿命のなかで「日干支」は最小時空間範囲
(一番短い時間の単位) です。そのようにいいました。
このことを人間に置き換えて“自分たち夫婦”とします。

日干支 — 自分たち夫婦



人間の最小集団である

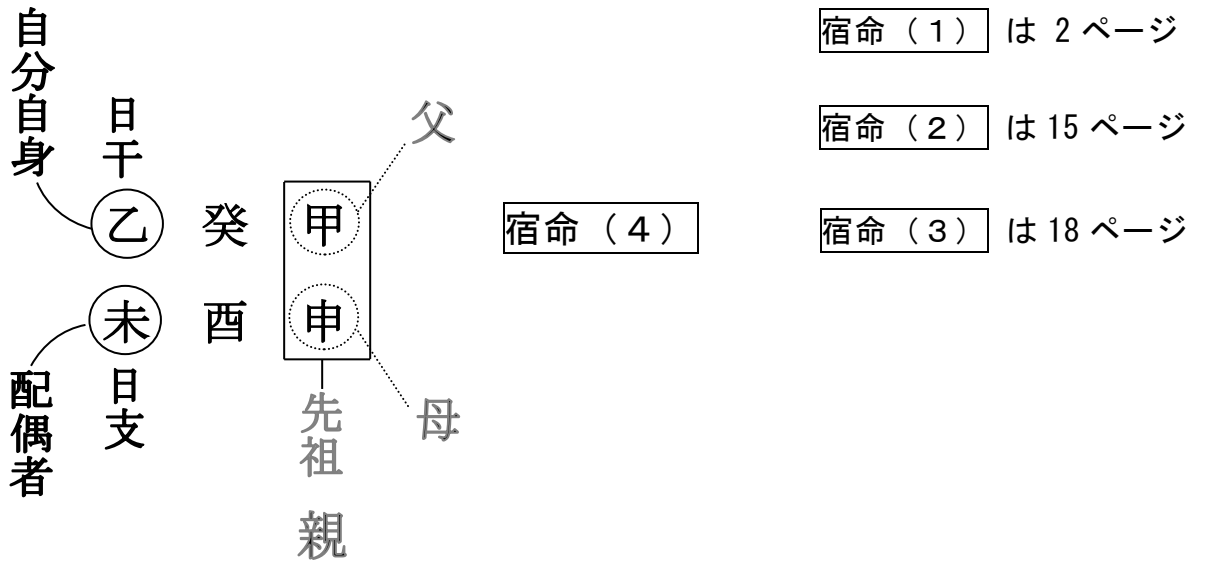
人間の集団のなかでは、“最小の集団は夫婦”だと考えて
います。

夫婦は合計で二人ですから、自分にとっての最小集団と
考えます。二人よりも小さい集団はありませんよね。

兄弟の場合は、何人いるのかわかりません。

親と子の場合でも、子供が生まれて家族を形成します。

二人という最小集団である夫婦は、最小時空間に位置し
それは「日干支」だと考えています。



自分自身が〔男〕とか〔女〕とかではなくて、あくまでも、**宿命(4)** は自分の宿命です。

「自分自身の宿命」です。

自分にとって、自分自身は、当然（陽）です。

陽的立場ということで、自分自身が上に位置します。

そして、自分の配偶者（結婚相手）が下に位置します。

☞ 〔上がよくて〕〔下が悪い〕とか、あるいは〔上下の差〕という考え方は、一切ありません。

「夫婦は同等である」と考えています。

このことは勉強が進みますと出てきます。

日干支「乙未」の姿は、自分と配偶者とで、一つの組をつくっているというふうに考えます。夫婦はペアです。

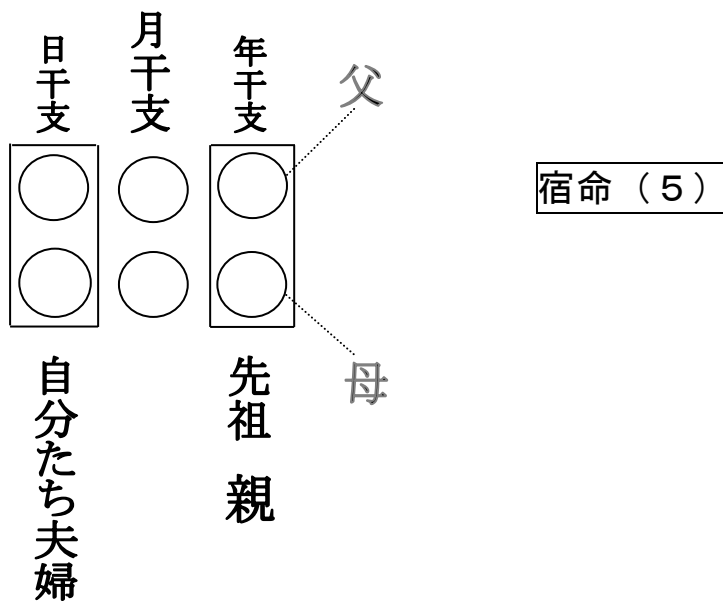
☞ 最後は、^{げっかんし}月干支 — ^{ちゅうじくうかん}中時空間です。

「月干支」

「月干支」はやや難しいです。

「年干支」先祖の場・親の場所

「日干支」自分達夫婦の場所



「月干支」には、先祖でも、親でも、夫婦でもない人達が入ります。

ここでは(月支)のほうから、まずは考えていきます。 ➡

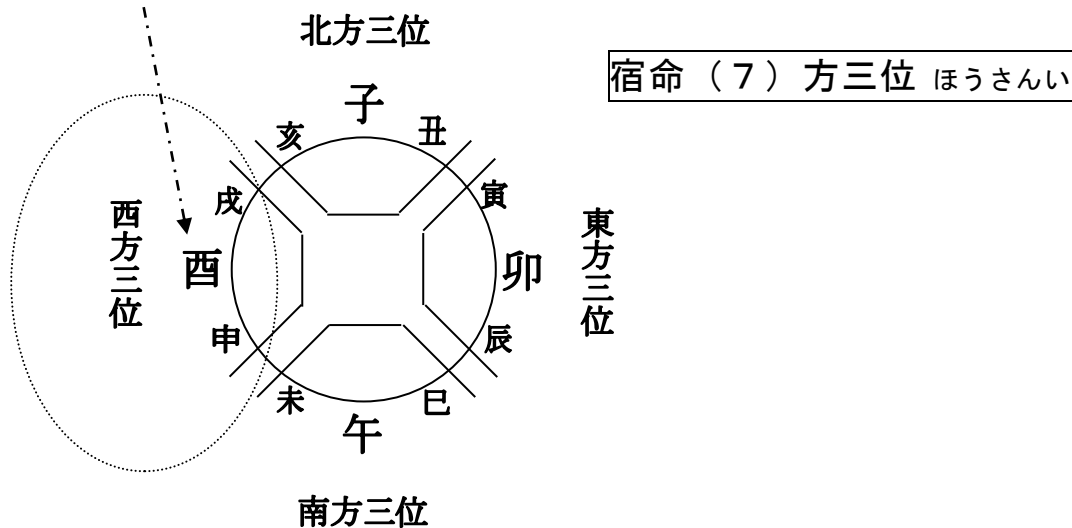
ここでは（月支）のほうから、まずは考えていきます。

日 干 支	月 干 支	年 干 支	
乙	癸	甲	宿命（6）
未	酉	申	

「月干支」を「月干」と（月支）の二つに分割すれば、もともと（月支）は季節をあらわします。

宿命のなかでは、（月支）が季節をあらわしています。

この人は酉月に生まれています。



ほっほう 北方・冬の十二支は（亥 子 丑） とうほう 東方・春の十二支は（寅 卯 辰）

なんほう 南方・夏の十二支は（巳 午 未） せいほう 西方・秋の十二支は（申 酉 戌）

せいほう とり
西方に位置する（酉）は秋の十二支です。

酉月に生れていますから、季節は秋です。

【初年】 8回目【十二支と陰陽論】 01 ページ【十二支と季節】 図A を参照ください。

☞ このことは、とても大切です。

7月に生まれたから〔夏生まれ〕だとか……9月に生まれたから〔秋生まれ〕だとか……そのように判断するのではなくて……、正確には、宿命の（月支）にでている十二支で（生まれた季節）を判別します。月支の十二支で判別してください。

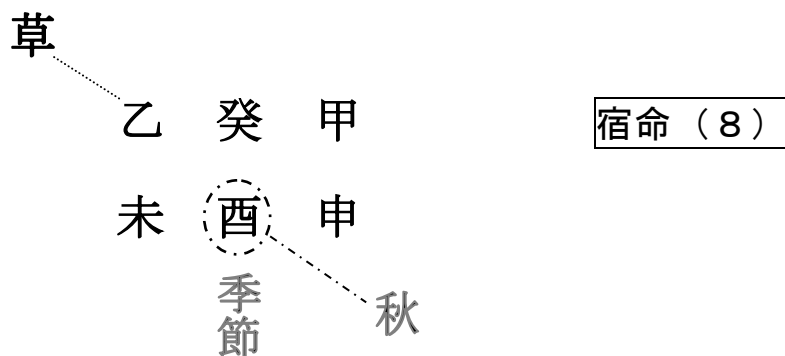
宿命（7）方三位 ほうさんい の十二支盤に書かれていますように、宿命の月支が（亥月）（子月）（丑月）であれば〔冬生まれ〕ということになります。

ここでの月支は（酉月）ですから〔秋生まれ〕になります。

ご自身の宿命をだして、月支の十二支が（寅）であれば、生まれた季節は 春 になります。

ご理解いただけましたでしょうか……とても大切です。

☞ 宿命を書きなおしました。



この人は、日干が「乙木」です。

「乙木」を自然界のものにたとえると、草木や穀物とかでした。その見方がありました。

🔍 34回目【人体図の出し方】05頁 **参考資料** を参照ください。

そうしますと、この宿命の人は、おなじ「乙木」でも、
（酉月）に生まれた乙木ですから、秋の草です。

この人は秋生まれの草です。

秋の草にとっては—— [なにがあるとありがたいのか？]

[なにがやって来ると、この草は枯れてしまうのか？]

そういうふうになんか考え・想いうかべることで、占いに発展して行くわけです。

その観方はまだやっていませんが、これから出てきます。

この宿命の月支は（酉月）なので、季節は秋です。

秋の草にとって、秋という季節は、どのような意味合いをもっているのでしょうか……。

この宿命の人物「乙木」は秋の草ですよ。

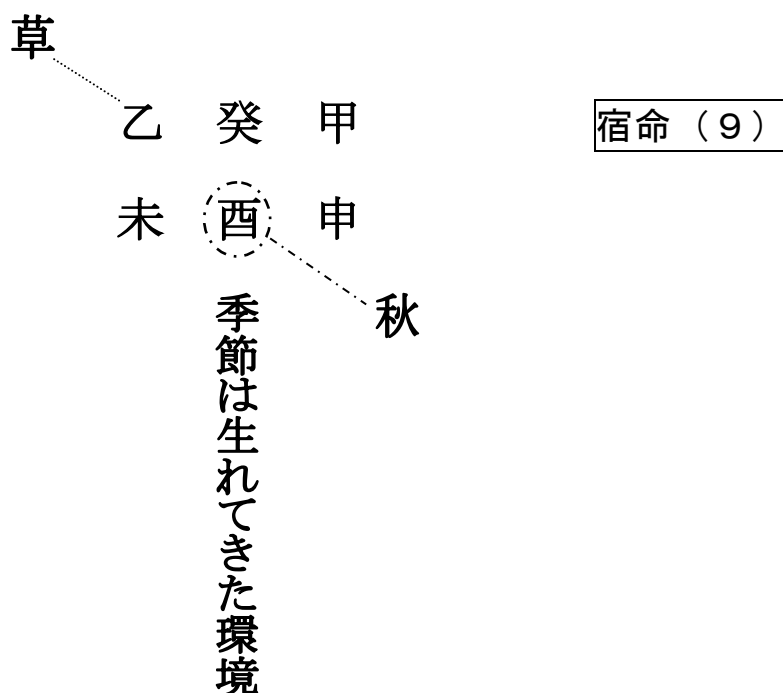
乙木（草）にとって、季節というのは、生れてきた環境をあらわすものですよね。

草にとって、季節は生まれてきた環境そのものです。

冬生まれの草の人もいます。 春の草の人もいるわけです。

おなじ草でも〔春夏秋冬〕のなかで〔どの季節に生れて来たのか……〕このことは、草木が生きていくうえで、とても大切なことになります。

季節は「乙木」が生れてきた環境です。



日干「乙木」の人でも、冬の草の人もいれば、夏の草の人も、春の草の人もあるわけです。

その季節は、草が生れてきた環境を現しています。

月支が（丑）であれば、冬の草です。

このように、（月支）は、生れてきた環境をあらわす場所になります。

この話を人間に置き換えれば、この人が生れてきた環境を現し、そのなかでも、最も重要なものは『家系』であると、算命学は考えています。

（月支）は家系をもあらわします。

この「乙木」は、秋という環境に生れて来たわけです。この草にとって、冬が来ても、春が来ても、夏が来ても、秋に生まれた草という事実は、枯れて死ぬまで^か変わらないのです。

それとおなじで、人間の世の中でいえば、この人「乙木」が、どんな家に生れてきたのか、それは一生を通して替わりません。

それは自分の^{りっち}立地であり、自分の家系であるからです。

〔たとえば〕100人のおなじ生年月日の人間がいても……
各個人はさまざまな家（家系）に生まれて来ます。

安倍さんという人が、どのような家に生まれてきても、
生まれて来た家で育つわけです。

人間は自分が生まれた家の環境で成長するわけですから、
その環境は成長の過程で、人生にもものすごく大きな影響
を与えます。重要な結果をおよぼす要因にもなります。

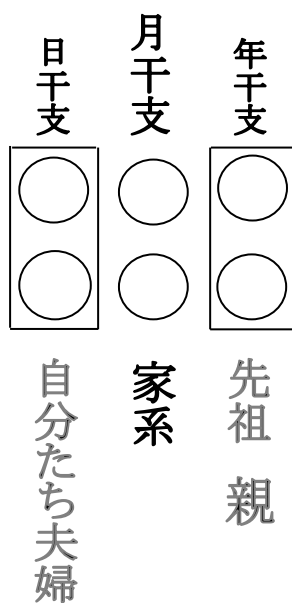
いま
現在の家に、自分が生れてきたから〔このような育て方
をされて〕〔こういう育ち方をして〕生きてきたわけです。
もし、別の家に生れていたとすれば、自分の人生は大き
く変わっていたはずです。

このことは、誰にでも当てはまります。

庶民の家に生れるのと、大金持ちの家に生れるのとでは、
人生は全然違いますよね。どちらが〔良いのか〕〔悪いの
か〕それは宿命によりますから、ここではわかりません。

普通の家で生れて来ると、皇族の家に生れるのとでは、
人生はまったく違ってきます。

それゆえに、どういう家系に、どういう環境を背負って
生まれて来たのかを意味するのが、宿命では月支です➡



宿命 (10)

(月支)は「家系の場所」として、占いをしていきます。

(月支)は自分の立地(生まれた季節・環境)でもありますが、その意味合いをつかって、占っていきます。

これから先々において、自分と家系の繋がりを観ていくようにもなるでしょう。

自分は家系にとって〔どういう役目をもっているのか〕

自分の宿命は〔家系から離れるほうがよいのか……〕

〔家系から出ないほうがよいのか……〕そういう占いに発展していくようになります。

☞ 最後は「^{げっかん}月干」です。

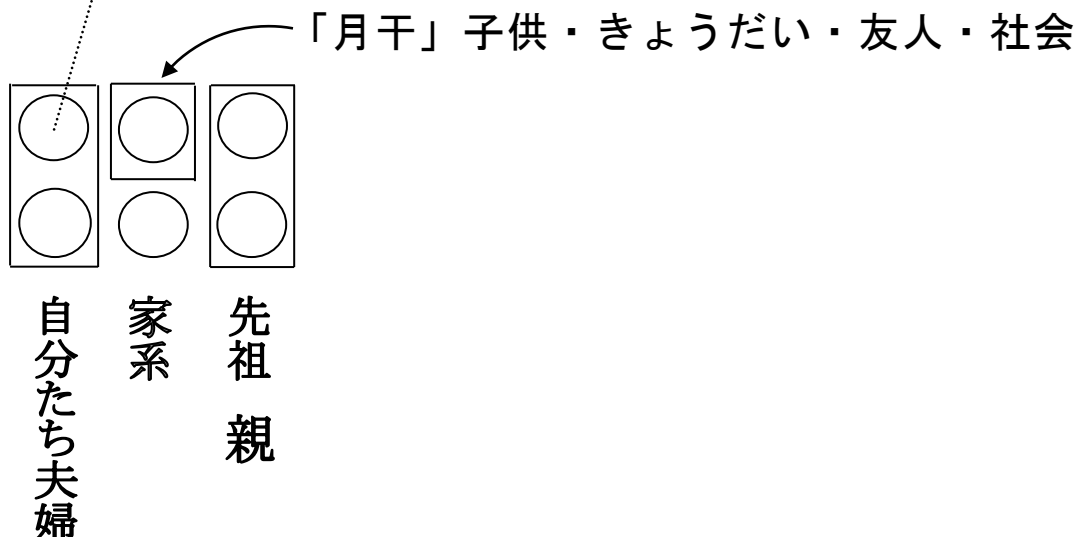
「月干」

「月干」は、先祖でも、親でもない、家系でもない——自分たち夫婦でもない人達、そういう人たちは、すべて「月干」に含まれます。

「月干」には子供も含まれますし、兄弟も含まれますし、あるいは、人生を歩むなかで、友人なども含まれます。そして、社会に出れば、社会の人達とも多くのつながりをもって生きて行きます。それゆえに“は社会の場所”というふうにも考えます。

「日干」をAさんとすれば、「月干」はAさんの社会の場所になります。

宿命 (1 1)



ただ—— 宿命 (11) の「月干」のなかには、子供・兄弟もいれば、社会の人達の友人もいれば、上司もいれば、同僚もいます。

そういう人たちも含めて、そのなかで、**A**さんという人にとって、最も大きく影響してくると想われる人物は誰なのかと考えますと、一般的に“子供”でしょう。

その人物の生き方によっては、^{えん}縁が深くて影響を与える兄弟もいるでしょうが、一般論としては、兄弟は子供の頃は家族ですが、大人になったら一緒に暮らしません。

将来的には、兄弟は家族ではなくなり、親戚になります。ところが子供は、その子供自身の生き方にもよりますが、一生一緒に暮らすかも知れないのです。

兄弟と比べると、そうなる場合が多いはずです。

自分の跡継ぎになるかも知れないし、先々自分の面倒を^み看てくれる、ということもあるでしょう。

どのような子供が生まれるのか…… [親思いの子なのか]

[優秀な子なのか] [親と一緒に暮らさないほうが子供にとって

はよいのか？ ⇒ ことについては親子の宿命によります] ……

さまざまな親子の状況があるわけですが、いずれにしても、Aさんの人生は、生まれて来た子供の影響を受けるようになります。(このことはどなたにとってもおなじです)

それゆえに、最もその人の人生に大きな影響を及ぼす^{およ}と思われる人物は、子供だと考えています。

このような意味合いから、「月干」はその場所の代表者として「子供の場所」というふうに考えておいてください。

☞ 実際に占うときは、その案件の状況によって異なります。兄弟の場所として観たり、友人の場所として観たり、社会の場所として観たり、国家占法では政府と位置づけて占ったりすることもあります。

さまざまに応用しますが、主としては“子供の場所”です。

☞ 最終的につぎのように考えておいてください。

「年干」父親の場所 —— (年支) 母親の場所

「月干」子供の場所 —— (月支) 家系の場所

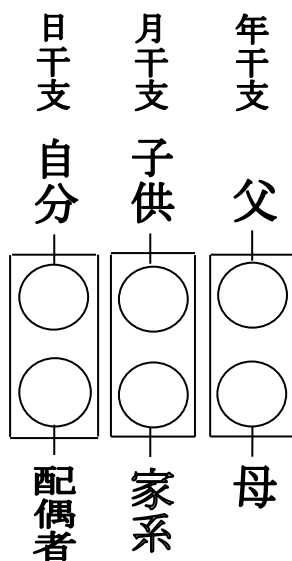
「日干」自分の場所 —— (日支) 配偶者の場所

☞ 最終的に、つぎのように考えておいてください。

「年干」 父親の場所 —— (年支) 母親の場所

「月干」 子供の場所 —— (月支) 家系の場所

「日干」 自分の場所 —— (日支) 配偶者の場所



宿命 (1 2)

占うときには、主として“人物の場所”として観ます。

宿命 (1 2) の人物の場所が、占うときの最も重要な観方とおもってください。

6つの人物の場所は、ぜひ覚えていただきたいのです。

この6つは覚えるものと思ってください。お願いします。

といいいますのは、「陰占の占い」に入っていくようになりますと、これらの場所をつかいます。

通常の占いにおいて [たとえば] 「私、今度結婚をしますけど、どうでしょうか？」とか、「子供ができたのですが、どうで

しょう？」とか、「別な仕事をしたいのですが、どうでしょう」
とか、そのようなときに……6つの人物たちに全く関係し
ないで、占いをするということはまずないのです。

〔たとえば〕「新しく仕事を始めようと想うけど、どうで
しょう？」とかの場合であれば……、

〔親に半分出資してもらおうとか〕〔現在の会社を辞めて、親の仕
事を継ぐとか〕あるいは〔親の仕事を手伝っているけど、辞め
たいとか〕とかの案件があるとすれば、そこにはさまざま
な理由が存在するでしょう。

占うときに、「現在、親との関係はどうなっているのか」
ということを観る場合もあります。

あるいは、配偶者が関係してくることもあるでしょうし、
自分の子供の運勢が関係してくる場合もあります。

占いをしますときには、必ず、といってもよいくらい、
人物の場所をつかいます。

それゆえに、覚えなければいけない「場所」と「人物」
である。そのようにおもって頂きたいのです。

【初年】 38回目【陰占宿命】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】 39回目【おうそうきゆうしゆうしほう旺相休囚死法】です。